

第 56 回 GCOE セミナー (2010-11-15)

南アフリカ史のなかのブリティッシュ・アイデンティティ

堀内 隆行

新潟大学人文社会・教育科学系准教授

司会：それでは始めさせていただきます。本日はコンフリクトの人文科学セミナー第 56 回になります。今日の講師は新潟大学人文社会・教育科学系の堀内隆行さんをお願いいたしました。題目としては南アフリカ史の中のブリティッシュ・アイデンティティということで、南アフリカのいわゆる白人の中でも、イギリス系の人々の歴史についてお話を伺います。お話を伺った後で質疑の時間をとっております。それでは堀内さんよろしくをお願いいたします。

堀内：ご紹介に預かりました堀内です。よろしく申し上げます。今回は南アフリカ史のなかのブリティッシュ・アイデンティティというタイトルで準備をいたしました。

レジュメはかなり簡略につくっております。1 頁目の地図ですが、右下のほうにある「以前の」というのは、「アパルトヘイト撤廃以前の」という意味で、当時の南アフリカの州区分が今回の話によりかかわってくるようになります。大まかに見ると、ケープ州、ナタール州、オレンジ自由州、トランスヴァール州以外は、南アフリカではなくて別の国になっています。

「はじめに」ですが、そこに書かれていることは最新の人口推計で、南アフリカの国民の分類がどのようになされていて、それぞれのパーセンテージがどうなっているかです。総人口は 5,000 万くらいで、そのうち「アフリカ人」とカテゴライズされる人々が 79.4%、「カラード」が 8.8%、「インド系／アジア系」が 2.6%で、「白人」が 9.2%になっています。

「カラード」はふつう、有色人種全体というイメージで捉えられますが、南アフリカではケープタウン周辺の先住民、解放奴隷ないし混血の人々を指します。そして「インド系」というのはとくにナタール州を中心に年季奉公人として連れてこられた人々を指します。

以上のような分類になっていて、歴史的には白人のパーセンテージが大きかったのですが、最近では減っていて 10 パーセントを切っています。

ブリティッシュ・アイデンティティというテーマと関連するイギリス系南アフリカ人について考えてみたとき、この集団は白人のなかで、アフリカーナと呼ばれるオランダ系につぐ第 2 集団という位置づけになります。歴史的には白人のなかの 6 割くらいがアフリカーナで 4 割くらいがイギリス系になっていますが、最近イギリス系のパーセンテージは拡大傾向にあります。イギリス系南アフリカ人は白人のなかでも第 2 集団で、パーセンテージは非常に小さいのですが、いっぽうで影響力が無視できないグループです。

たとえば、民主同盟というイギリス系の政党があります。現在、南アフリカの政権与党はアフリカ民族会議ですが、それにつぐ第2政党がDA（民主同盟）です。DAはイギリス系の支持だけではなく、ANC（アフリカ民族会議）の多数派支配に反発するアフリカーナ、カラードの支持を集めて西ケープ州議会の与党となっています。州知事もDAの党首が務めている状態です。

また、英語という問題を考えると、アフリカーナやカラードの母語は基本的にアフリカーンス語ですが、そうしたアフリカーンス語、アフリカ人の言葉であるバントゥー諸語を圧倒する、共通語のようなかたちになっています。これはアフリカーナ、カラードの母語が英語になるということではありませんが、英語の社会における重要性はますます強くなっています。

こうした問題を考えてみると、イギリス系南アフリカ人の影響力、あるいは英語文化の影響力は今日もなお強いものがあり、それには現在のさまざまな問題とともに歴史的な背景があります。文化統合、イギリス化の圧力によって、ブリテン諸島から渡ってこなかった人々が英語文化、ブリティッシュ・アイデンティティを共有してきたという、歴史的な背景の所産であるといえるかもしれません。今回は、イギリス系南アフリカ人が影響力を保っている現状の歴史的な背景を探っていきたいと思っています。

前半ではアフリカーナの話を中心にお話しして、後半ではカラードの話、最後にそれ以外のお話をしていけたらと思っています。

1の「アフリカーナとブリティッシュ・アイデンティティ」ですが、イギリス人がこの地域にやって来たのは18世紀の末のことですけれど、17世紀の半ばから今日のケープタウンの周辺はオランダ領になっています。オランダ領時代は150年くらいつづき、その後ナポレオン戦争の過程でイギリスがこのケープ植民地に入ってきて、最終的にウィーン会議によってイギリス領として確定します。それが1814年のことです。

このイギリス領ケープ植民地において、支配者側のイギリス系にとって問題となったのは、それまで支配していたオランダ系の入植者との関係をどうするかでした。オランダ系の入植者は、ケープ植民地がイギリス領となっても出て行かなかったのも、そうした集団にどういうふうに対抗していくかが課題となったわけです。

この課題を解決する方法は3つくらいありました。つまり、1つ目はオランダ系のイギリス化、2つ目はイギリス系移民の導入、3つ目は非ヨーロッパ系協力者の創出です。

まずオランダ系のイギリス化ですが、英語をオランダ系の第1言語としていく政策ないし社会的な圧力が進んでいます。しかし、これは容易に進むことではありません。ただオランダ領時代にもこういうヨーロッパ系のあいだでの同化の圧力は進んでいました。オランダ領ケープ植民地にはオランダ系だけではなく、亡命ユグノーのような集団が存在しましたが、彼らは基本的にオランダ化したとふつうは言われます。それと同じようなことを今度はイギリス側がオランダ系にたいしてしようとしています。

それは部分的にはうまくいきますが、だいたいうまくいかないもので、つぎに問題になる

のがイギリス系移民の導入です。つまり、イギリス系は少数派なので、イギリス系移民を導入することによって人口的に圧倒していこうとします。1820年、先ほどの地図で言うと、ポートエリザベスのあたりからイギリス系移民が入ってきます。しかし、イギリス系が少数派であるという状況じたいは変わりませんでした。

そこで3つ目にだいじになってくるのは非ヨーロッパ系をじぶんたちの味方として取り込むことです。当時入植が進んできている地域は今日の西ケープのあたりに限られるのですが、この地域にはバントゥー語を話す、後の時代でいうアフリカ人は存在しなくて、今日でいうカラードの人々が彼らの社会にいる非ヨーロッパ系の人々であったわけです。

こうした非ヨーロッパ系の人々を協力者として養成していくことは1つの課題になっていきます。この時期までケープ植民地では奴隷制がおこなわれていました。奴隷制はイギリス帝国全体での奴隷制の廃止とともに1834年に廃止されます。1854年になると植民地議会が開設され、その植民地議会では非ヨーロッパ系の選挙権も認められます。財産制限、教育制限はありましたが。このようにして非ヨーロッパ系にいろいろな権利を与えることによってじぶんたちの味方としていく政策がとられていったわけです。

こうした政策は、いっぽうではオランダ系の反発を招いて、後の時代に「グレート・トレック」と呼ばれる事件が起こります。これはもともとケープの内陸部にいたオランダ系の人々が更に内陸部に移動していった、19世紀の半ばにトランスヴァール共和国、あるいはオレンジ自由国を建国していくできごとです。

ただ注意しておかなければいけないことがあります。第1に、「グレート・トレック」は一時の大規模な移動ではなく、散発的な移動が積み重なって起こったことです。第2に、内陸部へのオランダ系入植者の移動じたいはオランダ領時代からすでにはじまっていたことであって、この現象はイギリス系にたいする反発だけではないことです。

そしてつぎに書いた「植民地社会の相対的安定」ですが、この時代の階級秩序が安定的な構造を持っていたことは、後の時代との関連で考えておかなければいけません。つまり入植者と入植者でない人々との階層的な差はわりとはっきりしていました。

19世紀末以降、そうした差異はしだいにあいまいになっていき、そこから新たなレイズムの登場、あるいはアイデンティティの組み換えが起こってきます。

19世紀末、南部アフリカではダイヤモンドと金が相ついで発見され、これにより南部アフリカは急速な産業化、あるいは都市化を経験します。この時代は同時に、イギリス帝国が南部アフリカ支配を拡大する時期でもあり、1880年から81年にはイギリス帝国とトランスヴァール共和国とのあいだに第1次南アフリカ戦争が起こります。

こうしたイギリス系の圧迫にたいして、オランダ系の入植者の子孫たちが、もともとじぶんたちの話し言葉であったケープ・オランダ語を、書き言葉のアフリカーンス語に組み換えていく動きも起こってきます。そうした動きは1870年代の後半くらいからはじまり、80年になると、南部アフリカで最初の政党であるアフリカーナ同盟が結成されます。

この時代には、イギリス帝国による南部アフリカ支配の拡大、あるいは産業化、都市化

の進展にたいして、後年のアフリカーナ・ナショナリズムにつながってくる動きが起こります。いっぽうでこういう問題は入植者のあいだの関係としてだけではなく、より広い、非ヨーロッパ系の動向とのかかわりのなかでも見ていく必要もあります。つまり従来、ケープ社会にはバントゥー語を話すアフリカ人はほとんど入ってきていませんでした。この時期以降、コーサ人と呼ばれる東ケープのアフリカ人たちがケープ植民地の社会に編入されていきます。更にコーサ人を含め、もともとケープタウンの周辺にいた非ヨーロッパ系の人々も産業化、都市化の流れのなかで社会的な上昇を果たしていきます。いっぽうで、とくにオランダ系を中心にして「プア・ホワイト」問題が表面化していきます。従来、階級的にヨーロッパ系が上、非ヨーロッパ系が下であったものが流動的になりました。

そうした事態に対応することもヨーロッパ系の社会にとっては問題になっていきます。つまり、これまで言ってきたアフリカーナ・ナショナリズムは、イギリスないしイギリス帝国にたいしての側面がもっぱらだったわけですが、たほうには両者が協力する側面もあり、それと表裏の関係になる、非ヨーロッパ系にたいするレイシズムが起こってきます。

こうしたことはアフリカーナ同盟のような組織によっても図られてきました。つまり、アフリカーナ同盟はこの時期に非ヨーロッパ系の選挙権の制限を図っていくわけですが、それはいっぽうで植民地の統治機構を握っているイギリス系の側による、オランダ系にたいするアプローチと対になってきます。

そこでつぎに挙げたのはセシル・ローズという有名な人物です。セシル・ローズは 1890 年から 96 年までケープ植民地の首相を務め 3C 政策を展開していきますが、そのなかでケープ植民地を南部アフリカ支配の拠点としていく必要がありました。そこで政府なり植民地の基盤を、より広範な住民層に広げていく必要があったのです。国民を創出していく必要に迫られていたわけです。そうしたなかで従来、ともすれば敵対的な関係であったオランダ系をも、南アフリカ人という概念にとり込んでいこうとする動きが起こってきます。

わたしは以前から、ヨーロッパ系の側の歴史叙述の問題にたいして関心をもっています。この時代にセシル・ローズに指名されて「植民地修史官」という立場になった G・M・シールという歴史家があります。シールは南アフリカ史研究の父とも呼ばれるわけですが、シールの南アフリカ史研究の一節を挙げてみました。この引用は 18 世紀から 19 世紀への転換期、ケープ植民地がオランダ領からイギリス領に変わるときにかんする叙述ですので、「征服者」というのはイギリス系のことです。「被征服者」というのはオランダ系になります。「…征服者と被征服者は同じ人種だったので、ケープ植民地がイギリス軍に降伏したことにより、両派は和解した。全てのヨーロッパ諸国民中、ネーデルラント北部の住民は、イングランドとスコットランドの人々にとってもっとも血縁的に近いのである。…」

このようにイギリス系とオランダ系との和解を強調し、共通の人種的な特徴を持つ人々が一つの南アフリカ国民となっていく、そういうストーリーになるわけです。この時代に使われたカテゴリは整理してみる必要があると思いますが、人種的なカテゴリがだいじになってきます。一つは統計などでも出てくるようになる白人です。

もう一つはより狭い概念ですが、「テュートン人」で、イギリス系とオランダ系を横断する概念として用いられるようになります。これをとくに主張したのは、作家のオリブ・シュライナーという人物です。オリブ・シュライナーは通常、イギリス史の女性参政権運動などでも語られる人物なんですけれども、「テュートン人」という概念を持ち出した人物としても重要になってきます。

人種的な概念とは違った概念も登場してきます。それは「ケープ植民地人」、「南アフリカ人」という概念です。この時期はちょうどイギリス帝国再編の時代でもありました。つまり南アフリカ、南部アフリカに限らず、カナダやオーストラリア、あるいはニュージーランドのような白人定住植民地の自治が拡大し、自治が拡大した植民地に根ざしたかたちで、イギリス帝国が最終的にコモンウェルスというかたちに再編されていく植民地ナショナリズムの時代であったわけです。

つまり彼らはイギリス人、オランダ人ではなく、「ケープ植民地人」であり、あるいは後の時代になると、「南アフリカ人」になってくるわけです。それは更にいうと、「アフリカーナ」ということにもなります。

「アフリカーナ」は現在の文脈ではオランダ系の人々にたいしてもっぱら使われる概念ですが、この時代まではイギリス系とオランダ系を横断する概念として立ち上がっていました。つまり、「アフリカーナ」はもともとオランダ語起源の言葉ですが、オランダ領時代、アフリカ起源の人々のことをとくに「アフリカーナ」という言葉で指していました。それが後の時代になってくると、オランダ系もイギリス系も両方含めて植民地生まれのヨーロッパ系の人々を指す概念となってきます。それが 20 世紀になるとオランダ系に限られた概念として登場する、というかたちで推移していくわけです。

この時代までは、イギリス系とオランダ系の区別は、ときにあいまいです。つまり「アフリカーナ」という概念はイギリス系もオランダ系も指し、とくにオランダ系のことを言う場合には「オランダ系のアフリカンダ（アフリカーナ）」という言い方をします。ただ「イギリス系のアフリカンダ」という言い方をあまり目にするのではなく、それに対応する表現は「イギリス系南アフリカ人」、「南アフリカのイギリス系」になります。

つぎの行ですが、第 2 次南アフリカ戦争がその後の時代に起こってきます。この戦争の原因を、おもに南部アフリカに求めるのは実際には難しく、イギリス帝国の側の政策によって引き起こされた戦争であるというふうに見るべきでしょう。ただ、そのもたらした結果は南部アフリカ社会に大きな影響を与えていきます。いっぽうではアフリカーナ・ナショナリズムの更なる高揚という事態を引き起こしますが、もういっぽうでは両者の「和解」も盛んに図られていき、それが 1910 年の南アフリカ連邦結成につながっていくわけです。

ここまでの展開は、ヨーロッパ系の間での統合が図られていくということになるかと思いますが、その後の時代になってくると両者はしだいに離反していきます。1924 年には、アフリカーナ・ナショナリストの NP（国民党）が政権を獲得します。これはそのまえの時代から問題になっていた「ブア・ホワイト」の支持を背景にして政権を獲得するわけですが、

彼らがとった政策は、一つには「ジョブ・カラー・バー」と呼ばれるもので、これは熟練労働を白人に制限して、非熟練労働は非ヨーロッパ系にさせる政策です。

もう一つには、コモンウェルスの中かで南アフリカの自立性を高める「南アフリカ第一」主義が 1930 年をはさんだ時期に展開していきます。「南アフリカ第一」主義は当然ながらイギリス系住民の反発を招きます。ジョブ・カラー・バーについても、従来イギリス系に協力してきたカラードの基盤を揺るがしていく政策になってくるので、そうした政策にたいする反発がイギリス系のあいだで展開していきます。

それがそのつぎの行に書いたブリティッシュ・リベラリズムです。これはインテリを中心にしてはじまった動きです。協議会運動というのがあって、イギリス系とアフリカ人ないしカラードとが対等の立場で協議会をつくって、経済的状況の改善などを訴えていく運動です。あるいはその運動を指導する機関として南アフリカ人種関係研究所が、アメリカ合衆国のカーネギー財団の助成によってつくられます。

こうした協議会運動ないし、人種関係研究所にかかわった人物として、ウォーカーがいます。ウォーカーはもともとイギリス生まれの人ですが、ケープタウン大学に就職して南アフリカ史研究をはじめます。ウォーカーは南部アフリカが専門の方には「フロンティアの伝統」という話で知られていると思います。それはつまり、この時期以降、南アフリカで本格的に展開していった人種差別は誰が引き起こしたかという議論でして、オランダ系入植者がケープ植民地の成立以来、徐々に内陸部に移動していき、そのなかで文明社会から隔絶することによって、しだいに人種差別思想を高めていくという議論です。

この議論はオランダ系入植者が文明的な世界から離れていったことが人種差別の起源であるというふうに言ういっぽうで、イギリス系の入植者は文明的な世界にいて、人種差別には一貫して反対してきたという主張にもなってきます。

それが以下の引用です。引用したのはウォーカーが 1937 年に書いた『W・P・シュライナー』という伝記です。19 世紀末のケープ植民地の首相であった W・P・シュライナーという人は、先ほど言ったオリブ・シュライナーの弟です。シュライナーが 1910 年の南アフリカ連邦結成のときに、どのようであったかを書いた一節です。

「…[南アフリカ]連邦結成運動の間、彼[もとケープ植民地首相 W・P・シュライナー]は、現実のものとなった立法府の統合の代わりに緩やかな連邦制を主張する唯一の、一流の南アフリカ人であった。彼がそうしたのは第一に、緩やかな連邦制のみが非ヨーロッパ人に対するケープの伝統的にリベラルな政策を、二つの旧共和国[トランスヴァール共和国とオレンジ自由国]のフロンティア的な人種政策より救い出すと信じたゆえである。彼は、ズールー族の族長ディヌズールー[1906 年のバンバタ蜂起で留置中]を弁護するために全国会議の[代表の]地位を辞し、[中央集権的な]南アフリカ法案との闘いをウェストミンスタの門前で展開した。…」

W・P・シュライナーやオリブ・シュライナーが他の同時代人に比べ、非ヨーロッパ系の政治的権利の擁護により大きな関心を持っていたのはたしかです。しかし、彼らの主要

な関心がそうした問題にあるのかは疑問です。なぜならばオリーブ・シュライナーや弟の W・P・シュライナーの関心は、白人の同胞、テュートン人の同胞にあったからです。

ただ、ウォーカーはそうした現実を歪めるかたちで、彼らが人種差別にたいする反対運動を展開していったことを強調しました。

もう一つは南アフリカ人という表現で、引用の中にも「唯一の、一流の南アフリカ人」という表現があり、この本のサブタイトルじたいが「南アフリカ人」となっています。

これは当時、アフリカーナはイギリス系にたいして、イギリス帝国にたいして忠誠心をもって、南アフリカにたいしては忠誠心を持っていないと批判しているのですが、(ウォーカーの主張は) そうではなく、イギリス系もまた南アフリカ人である、ということになってくるわけです。

1948 年以降になるとアパルトヘイトが展開していきます。この時期には、NP 政権による白人、イギリス系も含めた文化統合が図られていき、イギリス系も国民党 (NP) を支持する事態が起こってきます。

ただそういうかたちでまとめてしまうこともなかなかしにくい状況もいっぽうでは起こってきます。つまり、従来イギリス系は「イギリス系南アフリカ人」とか「南アフリカのイギリス系」という言い方をしていたわけですが、「ブリティッシュ (イギリス系)」という言い方は「イングリッシュ」という言い方に比べてより多文化的な響きがある言葉です。しかしこの時代からは **English-speaking South Africans** という、より排他的な表現を自称として使っていくこととなります。

そこまでのところはほぼヨーロッパ系の動向に限られた話でした。後半ではカラードの話をしていきたいと思います。

2 の「カラードとブリティッシュ・アイデンティティ」ですが、19 世紀末から 20 世紀のはじめにかけての時期について先ほど言ってきたことは、イギリス系とオランダ系との対立が高まっていくが、より広い視野で見ると、非ヨーロッパ系にたいするレイシズムがあり、その表裏の関係にあるものとして、ヨーロッパ系の統合が図られていくという話でした。

そうしたなかで非ヨーロッパ系にたいするレイシズムについても話してしまして、それはケープタウン周辺の先住民ないし解放奴隷ないし混血の人々であった、カラードの政治的結合も促していくことになり、このカラードの人々が 1902 年に APO (アフリカ政治機構) を結成します。

ただ、ここで注意すべき点は、カラードにとってはレイシズムにたいする反発もいっぽうではあるが、人種的な社会のなかで更に下位にある原住民との区別もまた重要になってきていたことです。

APO の機関誌の創刊号です。「…だれもが、南アフリカには原住民でない多くのカラードがいることをよく知っている。…かれらはもっとも不愉快なかたちで、という人もいるが文明の所産である。かれらはさまざまな程度の混血の所産でもある。その肌の色はカフイ

ールの黒から、ニグロのいかなる痕跡もほとんど見出せない淡い色までさまざまである。その多数派の特徴は完全にコーカシアンであり、生活様式も最良のヨーロッパのモデルに従っている。…」

この時代までカラードというのは、ケープタウン周辺のことではなく、有色人種全体を指す概念だったわけですが、APO は「原住民とは異なるカラード」をカテゴリとして生み出していこうとします。

いっぽうで植民地当局による人口調査においても、そうしたカテゴリの変化が起こってきます。つまり従来は白人とカラード、ヨーロッパ系と非ヨーロッパ系という区別だったわけですが、白人とカラードと原住民という三分法に変わっていく、そういう事態の展開があるわけです。

このようにカラードじしんも、あるいは当局の側も、カラードと原住民を区別していこうとするいっぽうで、今度は逆にカラードの側が白人に近づいていこうとする試みも起こっていきます。

白人に近づこうというときに、それはやはり、旧来から敵対関係にあったオランダ系に近づいていくのではなく、イギリス系に近づいていくことが課題になってきます。以下に引用しているのは「文明的な」英語と「野蛮な」ケープ・オランダ語を対比して、「文明的な」英語を使おうということです。「…[カラードは]英語-もっとも高貴な自由と解放の思想をもたらすことばであり、世界で最良の文学作品を有し、あらゆる言語のうちでもっとも普遍的に有用なことばに習熟すべきである。あまりにもしばしば聞かれる、野蛮なケープ・オランダ語（アフリカーンス語のもとになった言葉ですが、カラードの母語でもあります）で表現する習慣はできるだけ捨てよう。…」

レイシズムにたいする反発の側面があるいっぽうで、こうして原住民との区別をつけていくこともカラードじしんにとっては重要であったわけです。更にカラードの白人化、イギリス系に近づいていこうとする動きもあったわけです。

こうしたことが強まるのは 192、30 年代です。つまりアフリカーナ・ナショナリストがはじめて政権を獲得することによって「文明化労働」政策のような経済的ないし政治的な圧迫が強まっていく時代です。

この時代、カラードのアイデンティティ、当時の表現で言うと「人種の誇り」を明確化していくこともありますが、もういっぽうでは白人との共通性を主張することによって、「原住民にたいする差別」をじぶんたちが被らないようにすることも図られていきます。

そういうことを考えていくうえで重要になってくるのは、カラード・ヨーロッパ人協議会で、それは先ほど述べた協議会運動の一環です。ブリティッシュ・リベラリズムの立場に立つインテリたちと協同することによって、政治的権利を守り、あるいは経済的な苦境を改善していく動きが図られていくわけです。

この協議会運動にもイギリス系のリベラル派の歴史家が多くかかわっています。たとえば、ウォーカーと並んで重要な人物である W・M・マクミランです。この人はカラード・

ヨーロッパ人協議会ではなく、基盤がもともとヨハネスブルクにあった人なので、ヨーロッパ人・アフリカ人協議会にかかわっていて、その議長を務めた歴史家です。歴史家だけではなく人類学者にもかかわっていることですが、こうした大学の知識人や、あるいは聖職者、そういう人たちがこの時代以降主張していくようになるのは、カラードは原住民よりも優れているということです。ただ、優れているのは世紀転換期までに主張されてきたような混血性ではなく、カラードが文明化されてきたゆえだという主張です。

文明化されたというのは、イギリス領ケープ植民地の初期に、植民地当局が奴隷制を廃止したことです。植民地当局によって植民地議会にたいする参政権が与えられるなど、イギリス側のさまざまな努力によってカラードの文明性が高められてきた、だからこそカラードは原住民より優れているという主張を展開していくわけです。

引用ですが、「…多くのカラードの人々が[純血のバントゥーより]疑いなく一般に優れているのはおそらく、ヨーロッパ人の血が混合しているからではない。むしろ、オランダ語を習慣的に用いてきたこと、そしてしばしば英語にも習熟してきたことによって与えられた測りしれない利点、つまりヨーロッパ文明との長い接触のためである。…」

まへの時代まではイギリス系の歴史家は、オランダ系の入植者たちをどういうふうにじぶんたちの側に取り込んでいくかということに関心をもって歴史を語ってきたのですが、この時代になるとそうではなくて、非ヨーロッパ系の人々をどういうふうにじぶんたちの側にひきつけていくか、というかたちで歴史を書いていくことがポイントになります。

こうしたイギリス系のリベラル派の歴史家による歴史叙述はカラードじしんによる歴史の語りにも非常に大きな影響を与えてきます。1930年代という時期はカラードがはじめて本格的に歴史を語っていく時代です。

1935年には、1834年の奴隷制廃止100周年の記念ページントを、APOや、カラード・ヨーロッパ人協議会にかかわっている人々が主催します。こうしたページントでも強調されるのは、イギリス系とのかかわりによって、じぶんたちがいかに文明化されてきたかということです。またカラード教員養成大学の歴史教科書は1936年に刊行されたものですが、そこでも同じようなことがポイントになってきます。

更に、1938年のジーアヴォーゲルの『褐色の南アフリカ』でも、そうしたリベラル派の歴史家の影響を受けて、彼らじしんによる公式の歴史の語りをはじめっていきます。

この時代以降、親英的なカラードの政治的な影響力はいっぼうでは落ちていきます。つまり1940年代になると、トロツキスト系の非ヨーロッパ人統一運動が出てきます。1970年代になると黒人意識運動が本格的に展開してくるようになり、そのなかでカラードと原住民を区別する二分法が否定されてきます。ただ、そうした時代を経てもこうしたイギリス系との近しさを強調していく歴史叙述のあり方は、カラードじしんによって、伝統として根付いているわけです。

1986年の、教育者のファン・デア・ロスによる『アパルトヘイトの繁栄と衰退』、これはカラードの歴史を扱った本ですが、こうした本にも先ほど述べてきたリベラル派の歴史家

の影響を見てとることができます。

「おわりに」ですが、ここまで述べてきたのは非常に図式的な話です。イギリス系がケープ植民地に入ってきた 19 世紀の時点では、オランダ系との対抗が大きくクローズアップされていたわけですが、工業化、都市化ないしイギリス帝国の南部アフリカ支配の拡大のなかで、非白人にたいするレイシズムがいっぼうで展開し、ヨーロッパ系入植者を横断する南アフリカ人という概念がたほうで登場してきます。

ただ南アフリカ戦争を経てアフリカーナ・ナショナリズムが本格的に高まっていくなかで、イギリス系にとってはアフリカーナ・ナショナリズムとの対抗が大きな課題となってきます。そこで持ち出されてくるのが「全ての人種に公正なりベラリズム」としてブリテイッシュ・アイデンティティを定義する考え方です。

今回はカラードにたいする関心がイギリス系の歴史家のあいだで高まっていくことをお話しして、そうしたことと対になるように、カラードじしんによる英語文化の共有というものも進んでいく、という話でした。

ここまでのところで言ってきたことはじつは西ケープが中心の話でして、南部アフリカのなかでもナタール、トランスヴァール、ローデシアとか、そういう地域にたいする目配せはあまりなく、そういうところを含めて話をしていくと、また違った話のしかたになる可能性があることをお断りしておかなければいけません。

よりだじなことはアフリカ人との関係で、これはカラードの問題と重なってくることもあれば違うこともあります。今日の南アフリカにおける政治的な対立の構図は、ANC の多数派支配というものがあり、それにたいしてアフリカ人ではない人々がイギリス系を中心にまとまるという構図です。

そうした構図は現在の構図で、20 世紀の半ばの時期にはそうではない時代がありました。つまり、20 世紀のリベラル派というのはカラードにたいしても関心をもっていたが、もういっぼうではアフリカ人の問題にも関心をもっていて、アフリカ人の側も英語文化を共有することが、じぶんたちの生存戦略のなかで重要な問題になってきました。

たとえば 1976 年のソウェト蜂起という、名前はよく知られている事件がありますが、これは、高等教育の現場にアフリカーンス語での教育を広げる動きにたいして、アフリカ人を中心にして反発する、そうした反発を背景にした蜂起でした。

それは結局、アフリカーンス語は圧制者の言語ですが、英語は圧制者の言語ではないということがポイントになっています。この時代は「黒人」が、カラードやアフリカ人というカテゴリではなく、非白人全体に渡るアイデンティティを模索していた時代でした。しかし実際には非白人全体に共通する言葉はなく、それに代わるものが英語であったわけです。

もう一点、1994 年にアパルトヘイトが撤廃されたときに、南アフリカがコモンウェルスに復帰するということが起こります。南アフリカは 1961 年にシャープヴィルの虐殺がきっかけになって、アパルトヘイトにたいする国際的な非難が高まるなかで、コモンウェルス

を脱退します。

しかし 1994 年にアパルトヘイトが撤廃されると、今度はコモンウェルスに復帰するわけです。それは ANC 政権がイギリスないしアメリカ合衆国とのかかわりを非常に重視していることの現われでもあるわけです。

そうした ANC 側の動きと対になるのが、つぎに書いたイギリス本国における「恵み深き帝国」の表象という問題で、たとえば 2007 年、ロンドンに、ビッグベンとウェストミンスター寺院に囲まれたパーラメント・スクエアというのがありますが、そのパーラメント・スクエアでマンデラ像が除幕されます。

パーラメント・スクエアはほかにもイギリスの政治家の銅像がたくさん並んでいるところですが、そのなかに 2 体だけイギリス人ではない銅像が並んでいて、その一つは最近できたマンデラ像で、もう一つはスマッツ像です。

スマッツという人は、南アフリカのアフリカーナの政治家で、もともとはボーア戦争、第 2 次南アフリカ戦争のときには、イギリス軍にたいしてゲリラ戦を戦った人物です。その後は親イギリス的な政治家、第 1 次世界大戦でも第 2 次世界大戦でもイギリスの帝国戦時政策に協力していく人物になっていきます。

1920 年代のはじめと第 2 次大戦の時期に首相を務める人物で、国際的な名士でもありますが、そのスマッツの像は従来、パーラメント・スクエアに建っていました。それに加えて、マンデラの像が、非イギリス人の銅像としては 2 体目の像として除幕されたわけです。

これはどういうことかを考えてみると重要な問題が浮かび上がってくると思います。これは、イギリス系ではないが、親イギリス的とみなされてきた人の銅像を 2 体並べるということです。

マンデラが親イギリス的なのかどうかはじつは議論があるところですが、マンデラは世界的に解放運動の闘士という扱い方をされています。その自由と解放の思想がどこからもたらされたか、というと、イギリス人はそれがイギリスからもたらされたと考えています。

このようにイギリスが自由と解放の思想をもたらしたという意識が、イギリス本国におけるアイデンティティを考えていくうえでの重要な問題になってきます。

最近のケープ史研究をめぐっては「ブリティッシュ・ワールド」の研究が盛んにおこなわれています。これはブリティッシュ・アイデンティティの問題をブリテン諸島の枠だけではなく、イギリス帝国という枠のなかで考えていこうという研究です。こういう研究がイギリスでも、昔の自治領のカナダやオーストラリアや南アフリカでも盛んになってきています。ただこうした研究は、ブリティッシュ・アイデンティティの多文化性を過度に強調する、そういう傾向があります。

ただそれは、歴史家じしんのアイデンティティにかかわる問題としてそういうことを強調しているわけで、実際の歴史研究としては、排除のメカニズム、そうした問題にも留意していく必要があるだろうと思います。

最後にこのセミナーはコンフリクトがテーマになっていたわけですが、コンフリクトと

いう概念を広い意味で捉えたら、今回の話の一部はかかわってくるのかもしれないと思いますけれども、狭い意味で考えると、あまりコンフリクトという話でなかったので、申しわけなく思います。コンフリクトという概念については、みなさんのほうが考えてこられた経験はるかにありでしょうから、またみなさんのご意見を聞かせていただければと思っております。かなり駆け足になってしまいましたけれども、以上で終わります。

司会：ありがとうございました。意外と南アフリカのブリティッシュの話って聴く機会がないような気がしますよね。いつものように何かご質問等あればお願いします。

質問1：イギリス化という所が一つの発表のキーワードだと思います。南アフリカの多くの人が英語を話すと思いますが、イギリス人以外の方が英語を話す、自分たちの言葉を持っていて、自分たちの言葉を持つことが（音声途切れあり）、かなり排他的な要素を持つてると思います。みんなが英語を話せるから、ほかのオランダ系や（聴き取れない）のイギリス化ということではなく、逆にイギリス人のアイデンティティが揺らいだりすることはないのか、ということが気になりました。あとアフリカーナの人たちはイギリス人と同じように白人ですが、アフリカーナの人たちと、ヨーロッパ本国のオランダ人との区別は自分たちの中でかなりはっきりしてると思います。南アフリカのイギリス人はイギリス本国の人たちをどのように自分たちと区別してアイデンティファイしているのかという二つです。

堀内：両方とも重要で難しい問題です。後半のほうからお答えすると、アフリカーナとオランダ本国との区別ははっきりしているが、イギリス系の場合どうなのかということですが、やはり区別はできません。なぜなら人的な移動もけっこうありますし、南アフリカ生まれの人であっても、イギリス本国で教育を受けるなど、さまざまなレベルでの交流はいまでもつづいているからです。

それはアフリカーナとオランダのあいだでもありますが、イギリス系の場合、よりつづいていて区別ははっきりしないということになってくると思います。

前半の点も非常に重要です。イギリス系の側がイギリス化の動きから逆に受けてきたものがあるのか、ということになってくるかと思えます。ここでお話しした話の一部は多文化性ということ、あるいはリベラルということをじぶんたちのアイデンティティとして確認していくということでした。多文化的ということはイギリス本国のイギリス人であっても、アイルランドやスコットランド、ウェールズとの関係で一つ重要な問題になってくるとは思いますが、そうした多文化性やじぶんたちがリベラルであるということを確認していく、そういう場が植民地や帝国であったということは非常に大雑把な話としてはあると思えます。

最後にお話しした銅像の話でも、それはイギリス本国のイギリス人ということになって

きますが、植民地や帝国を持ったことによって、じぶんたちのアイデンティティを確認していくということがあります。ただそのことを具体的なレベルでうまく答えられない気がします。

司会：他にありますか。

質問 2：今日お話にあったような 19 世紀後半から 20 世紀にかけては、ウェールズ、スコットランド、イングランド、南アフリカのあたりはもう架橋するような、一まとめにできて、その中で帰属性というものを帰することができる、とても便利な概念だったわけですね。オランダに関しては私まったく知らないのですが、そういうものはなかったのかと思います。

ブリティッシュに対応するようなオランダ系に対して、つまり私たちは南アフリカ人であるけれども、かつオランダを包含するような、なにかしらの傘下になると言いますか、つまりスコットランド、アイルランド、イングランド、南アフリカが繋がれるような文脈でのオランダの何かがあったのかということをお聞きしたいです。

それと微妙に関連しますが、今日お話の半ばにあったイギリスの南アフリカ史研究、ここでのリベラルな伝統、イギリス系のリベラリズムの強調は、リベラル系保守のイギリス人であったら、こういうことを言うと思います。

しかしそれがイギリス系の外までどう共有されていったかというのは別の話で、たとえばオランダ系のアフリカ人の中で、オランダ系の伝統こそリベラリズムがあるという話はオランダ語の文献の中ででてこなかったのでしょうか。

もしそれが出てきたけれどもアフリカーナ・ナショナリズムに負けていったとしたら、それはイギリス系が数として少なかったことが重要だったのかどうかというような疑問がありました。最後一点、イギリス系が、私たちはリベラルだ、人種主義ではないということをするごく帝国主義的な中で言っていったということが面白いと思います。最近に近くなってから、反アパルトヘイト運動の中でも、いわゆる **English-speaking South Africans** からすごく支持者がありますよね。彼らは人種主義というものを今の概念でのアフリカーナ、オランダ側に常に帰していくような言動や考え方が見られたのかどうかということ疑問に思いました。以上です。

堀内：3 点質問があったと思います。1 点目は世紀転換期を中心にしてイギリス系とオランダ系をつなぐような概念としてブリティッシュのようなものがあったのかということですが、それは 2 ページの最後のところに書いたような表現です。テュートン人やケープ植民地人、南アフリカ人という表現になっていきます。

しかしじつはブリティッシュという言葉じたいも、ときにはアフリカーナを含むことがありました。もともとブリティッシュという言葉はブリテン諸島史の文脈で多文化的な含

みを持っていましたが、その多文化的な含みが植民地にも適用されることもありました。ただそれは一般的とはいえ、ヨーロッパ系入植者を横断する概念は、基本的には人種的な白人とか、あるいは南アフリカ人とかアフリカーナとかという言い方になってくるかなと思います。

質問者：オランダ本国人とオランダ系の南アフリカ人をまとめるような概念ということですか。

堀内：それはこの時代以降、両者を区別していこうということになっていくわけです。従来はオランダ人ということになっていましたが、この時代以降オランダ系ということを経験するのではなく、アフリカ生まれだということを経験していこうということになっていきます。それがアフリカーナという言い方になってきます。

アフリカーナという概念がそういうものとして出てくる時点で、本国のオランダ人とは積極的に区別していこうということになってきます。そういう区別を盛んに強調するのは、イギリス系が本国とのつながりをなお持ちつづけているのにたいして、じぶんたちは関係を絶っているということがポイントになってくるからです。

2点目でおっしゃったのはリベラリズムがイギリス系の占有物になっているが、そうではなく、オランダ系の側がそのあたりのことをどういうふうに歴史叙述などで書いていたか、という話だと思います。

オランダ系とかアフリカーナの側にも、本来はいろいろな歴史叙述の伝統があるということになってくると思います。非常に狭い意味で、アフリカーナ・ナショナリズムをアフリカーナの歴史叙述の伝統というふうに考えると、それはイギリス系による圧迫が19世紀のはじめからつづいていて、それにたいしてじぶんたちが民族というものに目覚めていくというストーリーです。

よりナショナリスティックでない歴史叙述の立場に立つ人は、引用で挙げたシールの歴史叙述を共有しています。つまりオランダ系とイギリス系はいつも喧嘩していたわけではなく、一緒にやっていた部分もあった。一緒にやっていたということになれば、イギリス系は非ヨーロッパ系にたいして寛容だったわけで、そういう伝統をオランダ系も共有しているというストーリーになります。じつはシール流の歴史叙述というのは、南アフリカの歴史教育の現場ではずっと影響力を持ちつづけていて、アパルトヘイトの時代はアフリカーナ・ナショナリストの政権の時代でしたが、その時代でも歴史教育で採用されていたのはシールです。

だからナショナリスティックな立場で歴史教育がおこなわれていたわけではなく、イギリス系にもより共有可能な立場が歴史教育のなかでは大きな部分を占めていたということになります。

3点目ですが、反アパルトヘイトということと、**English-speaking** というアイデンティ

ティとがどうつながってくるかですが、わたしの言い方がかなり乱暴になっているところはあります。

つまり反アパルトヘイト運動は、英語圏全体に渡るような規模を持った運動だとは思いますが、そのなかで **English-speaking** というアイデンティティがどの程度強調されていたかは疑問なところもあると思います。

歴史叙述では 1970 年代になるとラディカル派が登場してきて、イギリス系も人種差別について責任があるという立場が主流になってきます。ただ、アパルトヘイトの時代まではそういう立場で研究がされてきていましたが、最近こうした研究は廃れてきています。もともとニュー・レフト系の研究者がラディカル派を担ってきましたが、そういう研究者が再びブリティッシュの多文化性とカリベラル性とかを強調する立場の研究をするということも起こってきています。

そのことがやはり一番問題にしないといけないこと、ラディカル派の伝統があったはずだが、そういう伝統が南アフリカでの現実を反映して崩れようとしていることが問題になってくるかと思います。

質問 3：二つコメントがあります。一番目は堀内さんがおっしゃるイギリス化と英語文化の共有という概念についてです。イギリス化の中身についても英語というのを強調されていました。

そこで疑問に思ったのは、言語だけなのかということと、それよりももう少し大きな問題は 20 年代、30 年代のリベラル派を論じるときに、英語文化の共有という言葉がキーワードが出てきますが、それが果たして正しいのかと疑問が生じました。そもそも 20 年代、30 年代のイギリス系の人たちの中で英語文化という言葉はなかったのではないのでしょうか。

堀内：そうですね。

質問者：なぜこれがイギリス文献であるのか、英語文献ではなく、あるいはこれは文明と言い換えてもいいわけでしょうか。つまり基準として単に英語をしゃべるというだけではないように思います。

だから英語文化の共有ということを、我々と彼らの境界線を引くときの 聴き取れない にするのが正しい分析の観点なのかという、それが一つ目です。

二つ目はそれと関連します。20 年代、30 年代のリベラル派が果たしてどの程度リベラルであったのかということです。あまりリベラルであるように思えないのです。

それはなぜかということ、議論の全体がイギリス系を善玉にしてアフリカーナの人たちが悪者だというふうになっていると思うからです。つまりアパルトヘイトを作り上げて維持したのはアフリカーナの人たちで、イギリス系は違う、といふうにおっしゃっているように思いました。

イギリス系はもっとリベラルであるとおっしゃっているふうに聞こえました。だからアフリカ人やアフリカーナやあるいはイギリス系の一部の人たちが聴いた、そんなこととんでもないというふうに言うのではないかと思います。

つまりスマッツがロンドンの議会広場の銅像であるのと同様に、アパルトヘイトの体制がつくりあげられるときに、やはりイギリス系の人たちも非常に大きな役割を果たしているのではないのでしょうか。あるいは当時の見方からすると、アパルトヘイトイデオロギー自体が、進歩主義というか、リベラル的な側面があったのではないのでしょうか。だからある意味であれば多文化主義ではないのでしょうか。

堀内：そうですね。

質問者：それは英語文化を共有していない、あるいは不十分にしか共有していない人は別に一緒にやる必要はないのであって、別々に暮らしてもらいましょうということですよ。そこで、排除の論理というのは一部のカラードの人を組み込む論理とまったく同じ論理が使われているわけです。

そういう意味でこの20年代、30年代の、リベラリズムというのは果たしてどれだけリベラルなのかという…それともう一つ思い出したのですが、三つ目としてその20年代、30年代のイギリス系の人たちのリベラリズムというのが同時代のイギリス本国および他の植民地における人種間の取り上げられ方とどう関係していたのか、つまり一歩先へ行っていたのか、十歩先へ行っていたのか、同じだったのか、という三つの質問です。

堀内：ありがとうございます。1つ目の件ですが、イギリス化や英語文化の共有という表現は、かなり不用意に使っているところがあります。ここで言うイギリス系からのアプローチにはいくつかのものがあって、少し整理してみると、イギリス化と言うと、同化というか相手方の民族性を奪うような、そういうことになってくるかと思います。

文化統合と言うと、そうではなくもう少し多文化的な統合を指して、そういうことでもなく、リベラル派の歴史家がカラードの問題に関心を持つ、というレベルのことも入ってきます。

そのあたりは統一的な概念をつくるのが難しく、それぞれの状況に応じて使い分けていく必要があるだろうなと思います。英語文化の共有も、かなり不用意に使っていると思います。もちろん英語文化という表現じたい、世紀転換期、2、30年代になってもそれほど使われる表現ではありません。

単に英語の使用であったり、あるいは文明という概念であったりが同時代的には使われている、ただ、英語ということと、文明ということとがかなり密接に絡んできていて、そういう意味で文明化や文明性を考えるうえで、当時の人たちにとっては英語は不可欠な要素であって、英語と文明というのは切り離せない問題になってきます。

2点目はおっしゃるとおりでして、リベラルがどこまでリベラルだったかというのはたしかにそのとおりですが、ウォーカーは、イギリス系が善玉でアフリカーナが悪者だということしか言っていないわけではありません。

たとえば、ケープ植民地における議会の問題もウォーカーは研究していて、ホイッグ史観ということともかかわってきますが、ウォーカーはリベラルのなかでもかなり保守的な立場になってきます。整理すると、当時イギリス本国では、従来、保守党と自由党の二大区分であったものが、保守党と労働党が二大政党になってきて、自由党は徐々に衰退していきます。ウォーカーやマクミランは、そのなかで立場が変わってきます。

ウォーカーはもともと自由党系でしたが、しだいに保守党に近づいていきます。マクミランはそうではなく、労働党に近づいていきます。そういう政治的な立場の違い、イギリス本国での政治的な立場の違いもあります。

リベラリズムの問題は広く考えないといけません。アパルトヘイトじたいがたしかに多文化的な発想をもっています。つまり分離発展論なので、違う人種、違う民族は違うところで生活していくという思想にもとづいているわけで、それはある意味で多文化主義です。

リベラル派によるカラードなどの民族性の強調が、逆にアパルトヘイトを担う側にも利用されてくる共犯関係も、よく指摘される場所ではあります。

3つ目ですが、こうした問題が本国や他の植民地の問題とどうからんでくるかです。端的に言えば、ここで言っているウォーカーや、マクミランという人は南アフリカに居つづけず、イギリスに帰ってしまいます。

ウォーカーは1937年の時点でケンブリッジに異動しますし、マクミランはウィットウォーターズラント大学を1930年代のはじめに辞めて、イギリス本国に帰って、労働党の帝国政策の代表的なイデオログになっていく人物です。

とくにマクミランは、労働党の南アフリカ以外のイギリス領アフリカ植民地政策にかかわっていくことになる人物です。そういう意味でこのあたりの話は当然ながら南アフリカだけの話ではなくて、より広範なネットワークの問題として考えていく必要があることになります。不十分ですけど、このへんで。

司会：他にもなにかいかがでしょうか。

質問4：一つ伺いたいのですが、レジユメの4ページの右上のところ、マクミランのような、言ってみれば文明化の接触によって、カラードが文明的な距離として近い存在であるという語りが、カラード自身の中に影響を与えたというところをもうちょっと詳しく伺いたかったです。

あらかじめ自分の知っているケースについてお話すると、マグリブで植民地の支配者の側が作った歴史観としてよく知られているのが、アラブとベルベルという二項対立の図式があります。

ベルベルはカーブキープであって、ローマの時代からそこに住んでいる人々であって、そこにアラブが来てイスラム化した、言ってみれば墮落した人たちであったわけです。ベルベルは根源的にはむしろ白人的な存在であって、彼らを別個に取り扱うべきであるという議論です。

これは実は始めからあったわけではなく、20世紀になってから急に浮かび上がるもので、政策的に適用された時期はそれほど多くはないのですが、思想としてありました。それが戦間期ぐらいに出てくるとあまり時期をおかずして、それがアルジェリア人の側に転用されます。

アルジェリア人の歴史側がまさにフランス人が書いた歴史書を転用して、アラブとベルベルはまさに統合したということになります。アラブが融合することによって我らマグリブの民になったという意図せざる転用が行われます。

たぶんヨーロッパ人が先にヒストリーというものを作り、それを客体にされた側が利用するときに、必ずしも中央があり、周辺で影響を与えるというだけではなく、意図せざる変形が起こると思います。

例えばイギリスのいわゆるリベラルとカラードという関係にどういうねじれがあったのか、それとも、それは取り込まれてしまうものだったのでしょうか。

堀内：たぶんいまおっしゃった話で言うと、例として対応するものが少し違って、ベルベルとアラブの統合ということだと、カラードとアフリカ人との関係などに対応することになってくるかという気がします。

1930年代以降のカラードの政治運動のレベルではカラードを白人側に近づけるのか、アフリカ人の側に近づけるのかが問題になってきます。ここで挙げた35年のページェント、36年の教科書、38年の『褐色の南アフリカ』はすべてカラードを白人、イギリス系に近づけていくというかたちで、ストレートに影響を受けた人たちのことを言っているわけです。

しかし実際にはそれだけではなく、つまりカラードとヨーロッパ系とのつながりではなく、カラードとアフリカ人とのつながりを強調していくという立場もあるわけです。

ただまとまったかたちでの歴史叙述というレベルになると、それは乏しいということが一つあります。しかしながらあえて抽出すると、たとえば先ほどお話しした、非ヨーロッパ人統一運動が40年代以降に展開されてきて、そのなかで強調されるのは奴隷制ということですね。

過去にじぶんたちは奴隷制のもとで苦しんできた。いまは資本主義というものがあって、それもいわば奴隷制で、ただ現代の奴隷制はカラードだけではなくアフリカ人も苦しめている。そういう意味で奴隷制を一つのキータームにしなから、カラードの歴史として語られるところを、カラードだけの歴史ではない話として語っていくということがあります。

ただ、それはそもそも歴史叙述のポイントがイギリス系の側とかなり違います。つまり

イギリス系は奴隷制の廃止が話の起点になります。そうではなく奴隷制じたいを問題にするという歴史の語り方になってきます。そのあたりがかなりずれてくるということがあると思います。

ただ、もちろんイギリス系の歴史家の様々な研究成果を使っていけないとしかたがなかったところもいっぼうではあると思うので、そういう意味での影響は当然あったらうと思います。ただ、組み替えがかなりおこなわれていたことになります。

司会：そろそろ予定時間になってきたのでこの辺でセッションを終わりにしたいと思います。皆さんどうもありがとうございました。